

円環する純粹經驗を詩作の文体に刻む人
鳥巢郁美詩集『浅春の途』に寄せて

鈴木比佐雄

1

二〇〇九年秋にコールサク社から鳥巢郁美詩論・エッセイ集『思索の小径』が刊行された。この本の草稿を初めて読んだ時、私はこれほど論理的でありながら感性豊かな散文を書ける詩人が存在すると知って驚いた。実際の刊行後に多くの方から鳥巢さんの思索的な文体に賞賛の声を聞いたものだった。その本の葉解説文を書くために私は鳥巢さんの既刊詩集十冊をその折に読ませてもらったが、鳥巢さんは詩作に裏付けられた詩論・エッセイを同時並行的に書き続けてこられたのだということが分かった。

鳥巢郁美さんの詩の特長は、白黒で組み立てられた無機質で硬質な言語のような印象を伴いながらも、よく読むと発語した人間の精神性が、その無機質なキャンバスに多彩な色彩として立ち上

がってくる深みのある独特の立体的な文体なのだ。荒々しい世界の時空間の物質的な構造を詩の中で発見すると同時に、世界の中で小さな人間たちが、いかに精神性や感受性を抱えながら、懸命に生きようとするかを書き記してきた。鳥巢さんは広島県呉市に一九三〇年に生まれた。一時は北朝鮮にも住んだことがあるが、帰国し暮らしていた呉から広島原爆の衝撃音と光を体験している。戦後には広島女高師理科に進んで物理・化学・鉱物学を包括した「物象」の教師となり、一九五九年に第一詩集『距離』を刊行した。この詩集を読んですぐに分かることは、二十代後半の鳥巢さんの文体が、すでに確立されていたことだ。詩集には短い詩が多いが、詩「夜の構図」はその中でも長い方の詩だ。この詩は「物象」を語りながら戦後の世界を物語っている興味深い詩なのだ。

夜の構図

みずうみを背にした 針葉樹のたわみから
沈黙が露になってしたたるように

見極めることが出来ようか
肉を透過する磁力の逞ましさに等しく
骨の光を放つように用意されたときにだけ
鋭い尖光が放たれるのではないか
(「夜の構図」の前半部)

夜がはじまつていった
幾重にも交錯した夜の敷物を浸して
露の微粒子は拡散した
敷物の空間を充たしてしまつた
乱反射の喧噪を漂わせた敷物に
露の細粒が音もなく挑み
みずうみの底へ浸していった
敷物は光の反射を定着していた
反射のない世界で沈黙がこだまし合つた
はりめぐらされた敷物のすき間を縫つて
遠い星の磁力に応えた

《時間とは何であつたか》

時間のない世界に磁力は充ちている
きわまつた一点から放電が起るように
磁力の尖端はふるえている
一瞬の波動がすべて尖端になつていゝのを
その尖端との放電をなしうるのは
ただふかくふれ合うしかないのを

「夜の構図」のテーマは、沈黙が支配する夜の世界の構図だろう。どんなに昼が喧騒と光が満ちていようが、夜になれば沈黙が霧の微粒子となつて支配する。その沈黙の中で人は《時間とは何であつたか》と問われることになる。そして次の連の「時間のない世界に磁力は充ちている」の意味するところは、ニュートン力学や特殊相対性理論の限定された均質な時間ではなく、一般相対性理論の重力や磁力によって影響を受ける時間や空間の在り方を示唆しているのだろうか。理科の先生である鳥巢さんは、一般相対性理論などを踏まえて磁力などによつて物質間での引力や斥力によつて時空間を歪ませることに、何か人間同士の精神の相互影響力とも呼応する特別な力を発見したように思われるのだ。そのことを鳥巢さんは「た

だふかくふれ合うしかない」とか「肉を透過する磁力」とか言つてその内面の力を探っているようだ。それが「骨の光」であり、「鋭い尖光」などと言つた独特の言葉に転化されたのではないか。後半部分を引用してみる。

沈黙のなかでは

余りにも多くの粒子が胎動していた

彼等は激しい転回を試みた

転回の刹那にゆきあつた 粒子達の体当りが

高まつて 火花になつてゆくと云う

宿つてしまつたエネルギーを

秘めるてだてのない赤熱した粒子は

とどまることが出来ない

彼等の殺到した磁極からほとばしるものを

かつちりと受けとめる何かが

放射され 交錯した線のなかに

一つの距離と方向をもつてやつてくるとき

すさまじい尖光が発するだろう

星の磁力を受けとめる沈黙のように

が、次の連の初めで次のように記している。「星の磁力を受けとめる沈黙のように／骨の部分で放たれる尖光が 闇のうしろに展開するだろう」。このように原爆投下後の闇の世界の後る側に、人の「骨の部分で放たれる尖光」が決して消えることなく耀いていることを書き記す。「すさまじい尖光」が支配する「夜の構図」は、二十一世紀の今も継続しているように考えられる。その「闇の重さ」を六十年安保闘争前に若き鳥巢さんが書き上げていたことに私は驚かされた。原子のエネルギーを発見したが、その力をすぐに大量破壊兵器として使用した人類の罪深さや人類の進歩の時空間を歪みを、「夜の構図」として鳥巢さんは、書き上げなければならぬ使命感を持っていたに違いない。

2

第二詩集『時の記憶』は翌年の一九六〇年に刊行された。その詩篇は、様々な手法を鳥巢さんが実験を繰り返して、自分に相応しい詩法を探っていたのかも知れない。その詩篇の中に鳥巢

骨の部分で放たれる尖光が 闇のうしろに展開するだろう

みずうみの底に入った敷物から

喧噪の反射しない部分だけが光をうける

その陰画を浮かせてゆくだろう

時間のない世界にわれわれの沈黙はあつた

距離を辿つてゆくと終点がなかつた

時間と距離を置き忘れたみずうみの底で

真昼のネガを透過してゆく

尖光の果てるところに

たみこまれた闇の重さが

ひしめくように横たわつていた

(「夜の構図」の後半部)

後半部には、物質の粒子を利用する人間の「激しい転回」によつて「すさまじい尖光」が生れたことを告げている。「秘めるてだてのない赤熱した粒子は／とどまることが出来ない」。これは間違いなく原爆投下のことを語っているのだろう。そのことを鳥巢さんは淡々と記述しているようだ。

さんしか書けないであろう興味深い詩「曲る」があるので引用してみる。

曲る

真直ぐ歩いていると信じていた。それは直線であり それは水平であり 胸一杯にひろがる平面であり 垂直にのびる空であり斜面であり どこまでもつづく放射状の 交叉することなく。

端がないのが無限だから 接している世界はすべて無限にむかつてのびると 時間を積むと別の一日が開けるように 無限とはちがつた世界の積み重ねであると 日を重ねて何億年も経た地球が 同じ場所にいてもちがつた次元を形づくるように 時間がのび もとに戻ることはないから それは拋物線ではないと 時間がこれから先 どれだけ重ねられても端がないから 時間は直線に向つてのびると 時間と同じように どんな道も直線だろうと。 拋物線がず

んずんのびると、いつか弧を描いて又もとのあたりに帰ってくるので、時間が元に戻らないのは拋物線ではないと、空には端がないから直線はどこまでものび、真直ぐ進み、一つの源から発した放射線の、無数の分離、無限のひろがるように果てのない宇宙のなかにいると。

けれども宇宙には大きさがあるので、直線というのは拋物線で、ひとまわりしては少しづつずれて、ぐるぐると渦巻いている。楕円体の外まわりかも知れなくて、それならばちがった時間もやはり、楕円体の曲線のように、戻りながらまわっている。曲ってふくらむ世界だったか。

この「曲る」という詩を読んでいると、私たちが常識的に考えている自然の背後には、不思議な自然界の法則が存在するかも知れないと感ずる。しかしその法則も一つの仮説であって絶対的なものではない。天文学者や物理学者たちは、自然と対話し自らの仮説を思い描きながら数値化して実証しようとしているのだろう。鳥巢さんの詩は、

日常感覚を持ちながらも、そんな想像を絶するような宇宙の神秘を解き明かそうとする科学者たちの精神にも肉薄しているように思える。時空間の歪みとは何か。有限と無限とは何か。そんな根源的な問いを発してしまう人間とは何ものか。という様々な問いが溢れてくるのが鳥巢さんの詩の魅力なのだ。

3

鳥巢さんは一九六一年に第三詩集『原型』を刊行したが、その後記の初めに次のように記している。「生の原型、そして精神の原型、生命とは何であろうか。精神を操ってゆく生のすべてに、我々はいつも密着しながら生活している。個である筈の人間達、けれどもそれは絶えず拘わりつづける。生の根底にさまよい、他とのあいだに交わりをもつてゆくものは何であろうか。人々が求め、所有し、そうしてみずからのなかから発してゆかずにはおれない何か、純粹認識の原型であるもの、それは愛と呼ぶべきものかも知れない。又それは愛に対置するものであるかも知れない。」鳥巢さ

んの詩論ともいふべき「精神の原型」が思索的に語られていて、それが突き詰められると「愛」へと続いていく発見が強く深い精神性を感じさせる。三十代前半で鳥巢さんは、物理・科学・鉱物などの物質性を通して、このような純粹な精神や生命の「原型」を詩に記そうと志したのだろう。タイトル詩の「原型」という詩は、オーロラと太陽の関係を探っていく、そこに地球の不思議さを感じると同時に生の悲しみや「生の原型」を見してしまうのだ。

第四詩集『影絵』も同じ一九六二年の暮れに刊行されている。この詩集の最後の詩は「序章」というタイトルの詩だ。親しかった知人の死の顔に覆われていた白布が、一人の生の終わりを告げているのだが、強い日射しを受けて死者との関係を影絵のように「とおい絆」として思い起こしているように思われた。

第五詩集『春の容器』は五年後の一九六七年に刊行された。その五年間には仕事や出産などの難題を克服していったのだろう。鳥巢さんは比較的散文詩が多いのだが、三章の中に「は

じまる」という短い詩がある。多くの女性詩人は結婚し子供を生み、家族のためにだけ時間を費やさざるを得なくなり、いくら才能に満ち溢れた詩人であっても詩作を断念していくことがある。鳥巢さんの場合はその出産と育児と仕事を逆に自らの詩作の重要なテーマに寄り添うものとして書き記している。またこの詩には存在するものの初源を絶えず問い辿ろうとする鳥巢さんの特長が現れているので、引用してみる。

はじまる

光と闇と小さなほのお
おまえの卵はその中に芽ばえる
胸板を蹴立てて泳ぎはじめる
じつときき耳をたてておまえにささやく
あの小さな生命のかげり
いつかはじまってしまつたおまえを包む空しい
なにかの
底知れぬ意志　くらい渦巻

おまえはもつと静かにはじまっていたのだ
渦のはじめの途方もない静けさのなかにわずか
に浮かんで

一点の浮遊する意志であつたおまえ
位置は重さ 一瞬のつらなり
ゆっくりと渦巻いたおまえをかすかに辿つて
とまどいのようにふくらんでゆく卵

子を宿し母となる母胎の生の波動が詩の韻律として転化されたような詩だ。「おまえ」は、生れてくる子であり、自分の分身でありながらも、他者存在である命そのものを包み込んでいるようにも感じられる。すべての「はじまり」は、命の終焉を引き継ぐ命の宿りであり、その命との対話こそが一つのリズムとなつて甦るように詩作されたのではないかと思われた。このように自己の人生の転機を他者との関わりを広げる契機と捉えて書き記してきのだろう。「春の容器」とは母の母胎のことを暗示していたのかも知れない。

一九七五年に刊行した第六詩集『背中を』のタイトル詩「背中を」は、「わたくしの背中から何

かが逃げる／かなしみが逃げる」から始まり、内部に蓄積されていた様々な宝ものが喪失されていく悲しみを心なだめるように記している。

4

一九九三年三月に刊行された第七詩集『灯影』は十八年ぶりの詩集だった。鳥巢さんは神戸市に隣接した西宮市仁川に長年暮らしている。六甲山やその裾の街に植えられている植物などに触発された詩篇も多い。鳥巢さんが見詰める風景は、一枚の絵となつたり、ビデオ映像のようにくつきりと描写されて、しかも心の襲に触れてくる苦味のような味わいを感じさせてくれる。阪神・淡路大震災まで二年前に次の詩「陽の中を」が書かれていた。

陽の中を

沈む陽に鉄橋が浮き出している
横切つてゆく幾台かの車は
黒点のごとく

血の色に包まれ
魔の時に晒され

影絵となつて過ぎ去つてゆく
茜色に透かし見た木立も小鳥も
車と共に在ることをわずかに証す

ゆるゆると往くひと時
奢りも貧しさも一線に立ち戻らせた

巨大な西空
運びゆく瞬時をとどめた姿の
ゆさぶるものの妖しさの前に
並び立つかぐろい点景

鳥巢さんは夕暮れの街の「巨大な西空」に「ゆさぶるものの妖しさ」を感じている。全てのものたちは、家路に着くように忙しく過ぎ去つていくとする。けれどもそれを押しとどめるような巨大な力を感じ取っている。その力が何であるかは分からないが、確かに予感しているように思われる。冒頭の詩「顛音」なども六甲の山懐で鳴く鯛の顛音を「天と地に渡した豎糸の顛え」とも喩えて、地震を予感させているところが感じられる。

自分が暮らす自然や街がどこか喪失されるような不安を抱き、その自然や街並みを書き記していたのかも知れない。
翌年の一九九四年に刊行した第八詩『埴輪の目』にも、身近な植物や昆虫のいる風景や旅行風景を克明に描写しながらその時の心情を溶け込ませている。ただ冒頭の詩「花群」には、前の詩集にも存在したある種の予見的な詩行が見受けられる。

花群

細枝のけむる裸木の奥に
辛夷コナツハシの蕾が白い
鳥のこだまやこもりあう大気をめぐらせ
いつせいに噴き上がるいくつもの一輪
遠ざかる枝先をかすめて
一本の白い花群は炎となつてゆらめき
色褪せた枯色を截り拓いている
肌寒い風のまにまに誘われる宴の
ぐらりと揺れ戻す白炎のありか

呼び戻した地霊の疼き

目覚めた繭から

羽化するごとく咲き出る時刻

この詩集が出た五カ月後には阪神淡路大震災が起きて、鳥巢さんの家も室内は破壊され立っている状態で傾き辛うじて、家は何とか持ちこたえたという。しかし同じ並びの家では死者も出て街全体では大きな被害を残した。また詩集『原型』『時の記憶』『影絵』『背中を』『春の容器』などの装画を描いてくれた詩友であり、同じ地域の高名な抽象画家であった津高一が、妻と共に地震で亡くなってしまった。このような友人・知人の死を予見したのではもちろんないだろうが、「ぐらりと揺れ戻す白炎のありか／呼び戻した地霊の疼き」などの詩行は、鳥巢さんが潜在意識の中で西宮・神戸の「地霊の疼き」を察知していたような鋭い感覚が込められた言葉だった。きつと花群を見ることは、その花を生み出す根のある土壌を見通すことになり、突き詰めると「地霊の疼き」を感じることになり、繋がつてくるのかも知れない。

底なしの

辿りきれない時間の積もる

とつぷりと暮れた街をさまよっている

私はこの詩を読んでいると、大震災にあった人びとがその後どのような心境で生きているのかが、少し想像できる気がした。一瞬で生活していた場所が瓦解し、「空洞の心」になってしまふ。「虚ろに見開いた眼」が「瓦解の記憶」を繰り返し呼び戻してしまうのだ。そして人々が暮らしていた「辿りきれない時間」を集めながらいつまでも街をさすらうてしまうことになる。街が破壊されても、かつての街の時間は消えないで心に刻み込まれていて、失われた時間を現実のように追想してしまうのだろう。特に死者との思い出の場所がいたる所に存在している街の記憶は、決して消えることのない疼きのような痕跡となって反復されるだろう。そのような震災を経験した心境を鳥巢さんはこの詩に書き残したのだ。

鳥巢さんは、大震災の後遺症を抱える街の復興を共にしながら、一九九九年に第九詩集『日没の稜線』を刊行した。その中に「日暮れに」という詩があり、大震災後の街をさすらう詩がある。

日暮れに

ほの暗い日暮れをとろとろと歩いた
水のない川底を凝視めて

青いシートの連なる

抉られた空間である対岸を凝視めて

真昼の空の乾きに干からびた川

ひた走る揺れにひび割れた街

敷地を露わにして失われた屋並

砂をこぼす川原のように

空洞となった心が

影法師のようにつきまとっている

虚ろに見開いた眼が

途方もない節目であった時間を取り出し

まだ昏い早朝の激震のおびえと

一瞬に襲った瓦解の記憶を呼び戻してゆく

二〇〇三年に第十詩集『冬芽』が刊行された。春を待つ「冬芽」の辛抱強さが詩篇の中に貫かれている。曇り空の中にもひと筋の光明を見いだす鳥巢さんの精神性が詩に転化されている。

新詩集『浅春の途』には、I章十七篇、II章十八篇、III章十六篇の五十一篇が収録されている。I章の冒頭の詩は、「埋まってゆくととき」という雪に降りこめられた風景から始まっているのだが、その下の生けるものたちは赤い血を滾らせながら耐えている。そんな雪の情景を受けて次のタイトルの「浅春の途」では、冬の厳しさを慕いながらも、裸木の蕾が花咲く直前に、すでに花が咲き緑葉が生い茂る風景を透視する憧れのような思いを想像している。I章の詩篇は春から夏、そして秋へと少しずつ季節が進んで行きまた冬に戻っていく四季の移ろいの円環を記している。しかし一篇の中には、一色の季節だけの単純さだけでなく他の季節の追憶が重なり、重厚な時間が詰まっている。鳥巢さんのエッセイの中にある風景描写が詩の中では、もっと密度濃く屈折しながら多様な光を放っている。

II章は、歩きながら感じ考える人である鳥巢さんの歩行が詩篇として結晶している。大地震の廃墟跡も、エーゲ海の旅先も鳥巢さんの眼差しは、その場所で生きる人々の影のエネルギーの動きのようなものを察知して素描してしまう、溢れ出る表現者の業のようなものを感じさせてくれる。

III章は、最も鳥巢さんの個性が発揮される文体の散文詩群だ。様々な対象を見詰めて、その対象と対話を始めて、いつしか複雑な自分の心の襞を曝け出すように書き記している。この純粹経験のような散文詩を読むことは、貴重な未知の言語体験であるように私には感じられた。最後に散文詩「冬の終り」を引用してこの小論を終えたい。「冬の終り」は「浅春の途」に円環して繋がっていくのだろう。多くの人びとに鳥巢さんの詩の魅力を知って欲しいと願っている。

冬の終り

草木の精が地平で輪舞している 亡霊のように
に後びく生の炎が這い延びてゆく 秘めもつた

いのちの 奔放に伸びる生々とした動線の 地軸を手探っていつか躓いた瓦礫も 裂傷を負う棘も越え 幾度となく繰返していた匍匐 生きてあるさまさまの フィールドにも写し残す 片々とした印象持つ夫々 幾日かその姿を引き連れ それは忽ちに過ぎ越す季の足音

抗いを越える動の 旺盛に伸び互る草木の やがて枯れ枯れとなる日 荒んだその野面のはずれで はやばやと首持ち上げて輪舞する精に 立ち混じり 亡霊のように炎は這い延び 天空の一隅で明暗の現実を操ってゆく

時を指呼する精霊と 後退く翳りであった生の残り火との どのように奥深い出遇いを潜ませていたのか 泉の辺り 其処此処に韋く種子もまた 埋もれた幼卵の含みもつ いのちの焰が幻の囀を織り 地平を隅どる辺り 空無をなぞる動線の未だ昏い基底に 無数のひとつを紡ぎ重ねて 幾ばくか 苦み副う分厚い時の幟を 立ち昇らせる

鳥巢郁美詩集『浅春の途』 栞解説文

鈴木比佐雄

コールサック社
2010